

(別紙様式3)

令和2年3月31日

## 研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 愛媛県松山市一番町四丁目4番地2  
管理機関名 愛媛県教育委員会  
代表者名 三好 伊佐夫

令和元年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

2019年7月2日（契約締結日）～ 2020年3月31日

#### 2 指定校名・類型

学校名 愛媛県立三崎高等学校  
学校長名 若江 亨  
類型 地域魅力化型

#### 3 研究開発名

みさこう・せんたんプロジェクト～佐田岬半島・地域デザイン人材の育成～

#### 4 研究開発概要

##### (1) 地域を担う人材育成のためのプログラムの実施

今年度までに、総合的な学習の時間を中心に進めてきたプログラム「三崎おこし」を「地域デザイン」の観点から見直し、取捨選択、統合、再編等により効果的な活動へと組み直した。また、これまでは本校の立地上、学校周辺を中心に行ってきた活動を町内全体の活動へと発展させられるよう、研究を進めた。

ア 地域資源活用プログラム

イ 特産品の開発

ウ 県外フィールドワーク・地域おこし講演会・全国サミット

エ 情報発信

オ 地域理解

##### (2) 集落等コミュニティ課題解決・実践プログラムの実施

「地域デザイン・プログラム」に基づき、伊方町を旧伊方町・旧瀬戸町・旧三崎町の三つのエリアに区分した「地区」や、その他コミュニティに入って活動を行う実践プログラムを計画した。本年度は、旧瀬戸町で、集落交流活動「せんたん劇場」を開催した。

- (3) 集落等コミュニティに特化した課題解決カリキュラム（地域デザイン・プログラム）の開発  
 既存の枠組みでは捉えづらい「地域課題の設定(現状)」や「目指すべき具体的な地域の将来像(未来)」を見立てる構想力・企画力を身に付けるとともに、目標とする形を具体的に描き、実現していくプロデュース力（実行力・コーディネート力・修正力等）を、バックキャストイングの視点・手法から学ぶ課題解決カリキュラムの開発に取り組んだ。

カリキュラムにおいては、1年次を「地域理解」、2年次を「地域課題の発見・解決」、3年次を「ブーメラン人材として」と位置付けたカリキュラム編成に取り組んだ。

具体的には、1年次の「地域理解」では、地域見学や地域拠点における交流等を通して、伊方町や自分の住んでいる町への愛着や誇りを醸成する。

2年次の「地域課題の発見・解決」では、せんたんミーティングの開催やフィールドワークを含む課題別研究プログラムの実施等を通して、地域課題の発見とその解決策の企画・実施を行うことで、ブーメラン人材の育成に必要な力を育む。

3年次の「ブーメラン人材として」では、2年間の活動を基に、活動報告書の作成や成果発表会の実施等を通して、研究成果の地域への還元を図るとともに、2年間で学習したことを自分の将来にどのようにつなげていくかを考えさせることで、将来、ブーメラン人材として地元に戻ってくる生徒を増やすことができるような働きかけを行う。さらに、コンソーシアムと連携して、町内企業の合同説明会や大学時のインターンシップ受け入れ等、卒業生へのUターン支援プログラムの研究開発を行う。

5 教育課程の特例の活用の有無  
なし

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
運営指導委員会						○						○	
コンソーシアム								○				○	
カリキュラム開発等専門家								○	○	○	○		
地域協働学習実施支援員	○	○						○	○			○	○

(2) 実績の説明

ア コンソーシアムについて

(ア) コンソーシアムの構成団体

愛媛大学、NPO法人佐田岬ツーリズム協会、NPO法人さだみさき夢希会、NPO法人二名津わが家亭、伊方町役場（総合政策課、教育委員会）、公営塾未咲輝塾、愛媛県教育委員会高校教育課、愛媛県立三崎高等学校

(イ) 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
平成31年4月15日	コンソーシアムを組織
令和元年11月27日（第1回）	第1回会合 ・本事業の概要説明と開催時点における生徒活動報告 ・地域との協働活動をさらに進めていくために、情報発信の方法について検討 ・卒業生のUターン率を高めるための取組について協議 ・コンソーシアムの在り方について協議、情報通信機器等を活用した情報共有について提言
令和2年2月20日（第2回）	第2回会合 ・本年度事業報告 ・学校魅力化評価アンケート分析 ・生徒ループリック評価分析 ・来年度事業説明 ・来年度設置予定の学校設定科目「未咲輝学」について研究協議 ・学校設定科目「未咲輝学」設置に向けたカリキュラムの編成について協議 ・継続的に地域協働活動を行うことのできる仕組み作りについて協議

イ カリキュラム開発等専門家又は海外交流アドバイザーについて

(ア) 指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

濱田企画事務所代表 濱田竜也氏（非常勤職員として雇用）月5日程度学校で勤務

(イ) 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年11月25日	・令和元年度事業における活動計画について協議 ・校内ヒアリング
令和元年11月26日	・校内ヒアリング ・地域関係者ヒアリング
令和元年11月27日	・地域関係者ヒアリング
令和元年12月4日	・外部協力者打ち合わせ ・授業参加（総合的な学習の時間）
令和元年12月5日	・地域協働事業資料作成 ・授業参加（総合的な学習の時間）

令和元年12月6日	・外部協力者打ち合わせ
令和元年12月16日	・地域リサーチ ・地域関係者ヒアリング
令和元年12月17日	・地域関係者打ち合わせ ・地域リサーチ
令和元年12月18日	・地域リサーチ ・授業参加（総合的な学習の時間）
令和2年1月15日	・集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム「せんたん劇場」打ち合わせ ・授業参加（総合的な学習の時間）
令和2年1月16日	・「せんたん劇場」打ち合わせ ・開校記念行事参加
令和2年1月17日	・次年度カリキュラム検討 ・フリーペーパー「せんたん新聞」作成打ち合わせ
令和2年1月20日	・本年度事業の成果普及について研究
令和2年1月21日	・地域関係者打ち合わせ ・次年度カリキュラム資料作成 ・総合的な学習（探究）の時間担当教員と会議（今年度の活動と来年度計画について）
令和2年1月22日	・「せんたん劇場」打ち合わせ ・授業参加（総合的な学習の時間）
令和2年2月12日	・「せんたん劇場」準備 ・授業参加（総合的な学習の時間）
令和2年2月13日	・「せんたん劇場」打ち合わせ ・次年度カリキュラム検討（学校設定科目等）
令和2年2月14日	・「せんたん劇場」準備
令和2年2月15日	・「せんたん劇場」指導・助言
令和2年2月16日	・「せんたん劇場」指導・助言
令和2年2月25日	・本年度総合的な学習（探究）の時間における内容の検証 ・授業参加（総合的な学習の時間）
令和2年2月26日	・本年度成果の普及方法について協議 ・教科横断型カリキュラムについて協議 ・次年度総合的な学習（探究）の時間の実施方法について協議
令和2年2月27日	・今年度振り返り及び次年度カリキュラムデザイン方向性検討

ウ 地域協働学習実施支援員について

(ア) 指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

地域おこし協力隊 長瀬智寛氏 公営塾塾長と兼任で週5日勤務

(イ) 実施日程・実施内容

日程	内容
平成31年 4月22日	・令和元年度事業における活動計画について協議 ・地域協働活動の内容について協議
令和元年 5月18日	・「地域みらい留学」における本校探究活動の事例発表に関する協議
令和元年 5月22日、29日、30日	・「地域みらい留学」に同行、事例発表
令和元年11月27日	・第1回コンソーシアム参加
令和元年11月29日	・教職員対象の研修会を実施
令和元年12月20日	・令和2年度事業について協議
令和2年 2月15日、16日	・「せんたん劇場」参加
令和2年 2月20日	・第2回コンソーシアム参加
令和2年 3月 5日	・令和2年度総合的な学習（探究）の時間及び学校設定科目「未咲輝学」について協議

エ 運営指導委員会について

(ア) 運営指導委員会の構成員

愛媛大学社会連携推進機構准教授 秋丸国広氏、いよぎん地域経済研究センター専務取締役 森洋一氏、文科省CSマイスター 西村久仁夫氏、町見郷土館学芸員 高嶋賢二氏、伊方町立三崎小学校校長 柳希彦氏、伊方町立三崎中学校校長 米田功氏、伊方町役場総合政策課課長 橋本泰彦氏、伊方町教育委員会事務局事務局長 菊池嘉起氏

(イ) 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年 9月 4日（第1回）	第1回会合 ・本事業の概要説明と開催時点における生徒活動報告 ・本事業の効果的な取り組み方についての協議
令和2年 2月20日（第2回）	第2回会合 ・本年度事業報告 ・学校魅力化評価アンケート分析 ・来年度事業説明 ・来年度設置予定の学校設定科目「未咲輝学」について協議 ・生徒・教職員の負担を減らす工夫について協議 ・生徒の主体性を育むためのカリキュラムの編成について協議

オ 管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について

(ア) 職員体制に関する支援

- a 小規模校で地域活性化活動に取り組むことを希望する優秀な教員の配置
- b 本校出身の優秀な教職員の配置や、本校勤務年数が長い経験豊富な教員の配置

(イ) 取組内容に関する支援

- a 生徒のプレゼンテーション能力の向上支援（伊方町による全国高校生SRサミット FOCUSにおける京都府までの旅費全額補助）
  - b 生徒のグローバルな視点の習得支援（未咲輝塾による世界ユースサミット参加、トビタテ！留学JAPAN応募にいたる指導）
  - c 生徒のコミュニケーション能力の向上支援（県教育委員会によるえひめスーパーハイスクールコンソーシアムin南予の参加旅費の令達）
  - d 伊方町による本校地域活性化に関する特別授業における講師謝礼、旅費の令達
  - e 伊方町による本校地域連携事業（せんたんミーティング、せんたん劇場）におけるチラシ制作費用全額補助
  - f NPO法人佐田岬ツーリズム協会によるブイアートプロジェクト（地域資源活用プログラム）における活動支援
  - g NPO法人二名津わが家亭による廃校活用イベント（地域資源活用プログラム）における活動支援
  - h NPO法人さだみさき夢希会によるみっちゃん大福の普及及び販売活動（特産品の開発）における活動支援
- (ウ) 成果普及のための支援
- a えひめスーパーハイスクールコンソーシアムin南予の開催（2月4日、発表と意見交換）発表校
    - SGH指定校（宇和島南中等）、SSH指定校（宇和島東）、SPH指定校（宇和島水産）、地域との協働による高等学校教育改革推進事業（三崎）、地域の魅力発信高校生サイクリング事業（川之石、南宇和）
  - b えひめ地域づくりアワード・ユース2019（県教育委員会等後援）への参加支援
- (エ) 運営に関する支援
- a 運営指導委員会の開催
    - 年2回実施（9月4日、2月20日）
  - b コンソーシアムの開催
    - 年2回実施（11月27日、2月20日）
  - c えひめスーパーハイスクールコンソーシアムin南予の開催（発表と意見交換）
    - 2月4日実施

カ 事業終了後の自走を見据えた取組について

- (ア) コンソーシアムの継続・強化
  - コンソーシアムを継続することにより、地域との協働による学習環境の整備を引き続き行うとともに、そのネットワークを活用することで、組織体制の強化を図る。
- (イ) コンソーシアムの開催
  - 研修機会の確保や人的な支援により、教職員のスキルアップを図る。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な学習 (探究)の時間における地域での探究学習		○	○		○	○	○	○	○	○	○	
地域行事等への参加による地域協働学習		○		○	○	○	○	○	○	○	○	
外部行事等における探究活動		○	○		○				○	○	○	

## (2) 実績の説明

### ア 研究開発の構造について

本校では、1年次を基礎段階、2年次を研究開発段階、3年次を成果普及・研究完了段階と位置づけ、本事業に取り組んでいる。それぞれ、「地域理解」、「地域課題の発見・解決」、「ブーメラン人材として」というテーマを設定し、探究活動に取り組むこととしている。本年度は、本事業の1年目ということもあり、昨年度までの取組等も生かして研究開発に取り組んだ。

1年生は「地域理解」をテーマに、地域見学等の活動を行った。地域理解を深める中で、生徒たちは、地域への関心を高めるとともに地域の特性について理解し、次年度の探究活動の基礎となる学習を行うことができた。本年度の1年生は、半数の生徒が町外からの入学者であるが、ほぼすべての生徒が地域行事や地域のボランティア活動に参加するなどの成果が見られた。

2年生は、昨年度行った、地域の異年齢者との交流活動や地域の特産物についての調査・研究を基に、「地域課題の発見・解決」をテーマに活動を行った。生徒たちは1年次に地域理解活動を行っていたことで、課題研究のテーマを主体的に設定し、スムーズに探究活動を行うことができた。また、多くの外部人材と関わりながら活動に取り組むことで、コミュニケーション能力や実践力などを育み、活動の中心となって活躍することのできる生徒が増加した。その結果、日本の次世代リーダー養成塾やトビタテ！留学JAPANなどのプログラムに参加する生徒も出てきた。これらの生徒が地域協働活動をけん引することで、活発な活動につながった。

3年生は「ブーメラン人材として」というテーマで活動を行った。生徒たちは、各種発表会やコンテスト等で取組を発表したり、後輩への指導を行ったりする中で自分たちの活動を見つめ直し、地域への愛着や自尊感情を高めることができた。その結果、本年度の卒業生の地元への就職率が大きく増加するなどの成果が見られた。

来年度は、学校設定科目「未咲輝学」を設置することにより、より系統的かつ構造的な取組を行うことができるように研究を行っていきたい。

### イ 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

本年度の研究においては、地域を担う人材育成のためのプログラム、集落等コミュニティ課題解決・実践プログラムという二つのプログラムに基づき、地域課題研究を行った。

地域を担う人材育成のためのプログラムでは、「地域資源活用プログラム」、特産品の開

発や情報発信などの「課題研究」、外部人材との交流などを行う「県外フィールドワーク・講演会」「地域理解」という4領域での探究活動を行った。

(ア) 地域資源活用プログラム

地域資源活用プログラムとして、ブイアートプロジェクトと廃校活用イベントを実施した。

海岸の漂着ごみであるブイ（直径30センチメートルほどのプラスチック製の球体の浮き）をごみではなく資源としてとらえ、アート作品として再利用するとともに、海洋ごみ問題について考えるきっかけにするというものが、ブイアートプロジェクトである。本年度は、伊方町観光交流拠点施設「佐田岬はなはな」で行われた「はなはな祭り」で、ブイアートを活用したスポーツイベントである「ブイリンピック」を実施し、年齢性別を問わず多くの人の参加があった。また、全国連携ブイアート事務局からの依頼を受け、11月24日に「はまぎんこども宇宙科学館」（横浜市）で開催されたブイアートイベントで使用するブイの制作と、サンプルブイの制作を行った。地域で行われたブイアートイベントにも参加し、町内外の小学生に対してブイアートのワークショップを行った。今後は、地域でのブイアートワークショップ等をさらに行っていきたいと考えている。

廃校活用イベントでは、せんたん部が中心となり、廃校になった地元中学校を活用した「みさこうマルシェ」の企画・運営を行った。このイベントは、子どもの数が減少し、保育所、小学校、中学校が廃校になってしまい活気が失われつつある二名津地区を元気にしたい、という生徒の思いから企画された。本校の生徒だけではなく、川之石高校、小田高校の生徒やワークショップや飲食店、消防車両の展示など15以上の外部団体にも参加してもらった。町内外から200名を超える来客があり、域の人からも、「学校がなくなって寂しくなっていたが、楽しそうな声が聞こえてうれしかった。ぜひ、来年も実施してほしい」と喜ばれた。

これらの活動を通して、生徒は様々な視点から地域を見つめ直すことで、地域や地域資源の価値を再発見し、地域への愛着を高めることができていた。また、企画から運営までを行うという各過程の中で、調整力や実践力、コミュニケーション力といった本事業を通して育成したい力を、総合的に伸ばさせることができる機会になった。生徒たちは、自分たちのプロジェクトへの反応が直接帰ってくることに達成感を感じており、自己肯定感を高めることにもつながっていた。

(イ) 課題研究

課題研究としては、情報発信、イベント、特産品開発という三つの部門を設定した上で、より具体的な七つの研究班を編成した。生徒は、自らが興味のある研究班に所属し、探究活動を行った。

情報発信部門は、「アート」「情報・防災」の二つの班に分かれて活動した。

アート班は、ロータリーから正門に続く約500メートルの坂道、通称「未咲輝ロード」の壁画修復及び加筆を行った。これまでの壁画を基に、新たな風景等を書き加えることで、より華やかな壁画に生まれ変わった。また、集落等コミュニティ課題解決・実践プログラムにおいては、プログラムの中心となるアート作品の作成などを行った。今後は、町内各集落でのアートイベントの企画などを行っていく予定である。

本校は災害時の緊急避難場所となっており、地域の防災拠点としての役割を担って



いるため、情報・防災班は、校内の危険箇所の確認や、避難誘導模擬体験、妊婦や車いす使用者の避難訓練体験等、避難所設営時の課題点等の研究を行った。また、地域の特別養護老人ホームの協力を受け、避難所開設・運営に必要な知識や技術を学ぶための、避難所運営ゲームを実施した。今後は、地域防災マップの作製や、地域連携避難訓練、地域の特別養護老人ホームと提携して福祉の視点を取り入れた避難所設営や防災避難訓練の実施等を予定している。また、家庭科の授業や商品開発班と連携して、地元の特産品である魚介類や芋類、柑橘類等を活用した燻製やドライフルーツ等の保存食の研究を行っていく予定である。

イベント部門は、「イベント」「カフェ」の二つの班に分かれて活動した。

イベント班は、地域の大きな行事である「はなはな祭り」や地域の保育所、老人介護施設等で「みさこうたいそう115」を実施した。また、本校文化祭において、愛媛大学ダンス部と共同開発したダンスを披露した。今後も、各種地域行事や、小・中学校の行事等と連携して「みさこうたいそう115」を通じた健康普及活動等を行っていききたい。

カフェ班は、カフェのメニューとして、地域の特産品である「ちりめん」と「じゃこ天」を使用したピザを開発し、「みさこうマルシェ」と本校文化祭で販売した。また、伊方町主催で行われた「佐田岬ワンダーナイト」で、地域の特産品であるさつまいもを使って開発した商品を販売した。今後は、せんたん部の作成したマーマレードを使用したカフェメニューの開発等も行っていく予定である。

特産品開発部門は、「商品開発A」「商品開発B」の二つの班に分かれて活動した。

商品開発A班は、三崎地区の伝統的な織物である「裂織り」についての研究を行った。保存会の人に話を聞き、コースターとヘアゴム、トートバッグ等を作成した。今後は、商品化に向けて、保存会や地域おこし協力隊員にもアドバイスをしてもらい、製造・販売のルート開発等も含め、さらなる研究を重ねていく予定である。また、地元でUターンし、藍染めを行っている本校卒業生に、藍染めをしてもらったハンカチに裂織りのタグを付けた商品「あいたおる」を試作しており、来年度の販売に向けて研究を進めている。せんたん部と協働してのマーマレードの研究も引き続き行っていく予定である。

商品開発B班は、自然体験学習担当の地域おこし協力隊員と協働して、地元の交流施設である、瀬戸アグリトピアで栽培しているブルーベリーを使用した商品開発を行い、ブルーベリークッキーを製作して「みさこうマルシェ」で販売した。また、カフェ班や商品開発A班と協力して、瀬戸アグリトピアで栽培されているさつまいもの活用方法の研究を行った。今後は、さらなる商品開発や瀬戸アグリトピアを活用した体験活動プログラムの開発や旅行プランの開発等に取り組んでいく予定である。

せんたん部は、校庭のだいだいを活用したマーマレードを作り、ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバルに出品し、銀賞1、銅賞2という結果であった。来年度のアワードでの金賞を目指して研究を重ねていくために、12月20日に八幡浜市で行われた、過去のアワードで金賞を受賞した講師による講習会に参加した。裂織りと同様に、地域の人と協働して製造・販売のルートも開発していきたい。9月には第3回となるせんたんミーティングを実施し、県内外から6高校の生徒に参加してもらい、交流することができた。さらに、テレビ番組で紹介された「裂織りのシュシュ」も商品化に向け、研究を進めている。今後は、まち歩きガイドの実施や、サイクリングコースの

開発、三崎製錬所跡の研究などの、地域活性化プランの作成等を行っていく予定である。

各班における研究活動が、本事業の探究的な学びの中心となる活動である。本校は、他地域からの入学してきた生徒や、中学校時代につまずきを経験している生徒など、多様な生徒が在籍している。入学時には、伊方町への関心や愛着が低い生徒や、各班8人程度の少人数の班とはいえ、班活動や他者との協働を伴う探究活動を苦手としている生徒も少なくない。しかし、このような研究活動を通じて生徒は大きな成長を遂げ、伊方町への愛着を高め、探究活動に意欲的に取り組んだり、人前で堂々と発表することができるようになったりしている。個別最適化された学びの提供という観点からも、生徒一人一人がさらに意欲的に研究に取り組むことができるプログラムの開発に、来年度も取り組んでいきたい。

#### (ウ) 県外フィールドワーク・講演会

県外フィールドワーク・講演会として、7月30日、31日に山形県で開催された「第2回全国高等学校小規模校サミット」に参加し、生徒たちは全国の高校生と交流する機会を得た。他校の事例発表を聞いたり、多くの高校生と交流したりすることで、生徒たちは大きな刺激を受けるとともに、思考力や判断力、コミュニケーション力などの力を育成することができた。本校は、全体会で唯一の事例発表校ということもあり、参加生徒たちは、準備段階から意欲的に取り組み全体発表を行うことで、大きく成長していた。

10月には、株式会社ハッシュダイより勝山恵一氏を講師として招き、「CHOOSE YOUR LIFE～自分の人生を自分で選択しよう～」という演題で地域おこし講演会を行った。生徒からは、「自らが動くことで、多くの人との関わりが生まれ、人生が変わることが分かった。今後の三崎おこしでも自分から積極的に行動したい。」「自分の人生を自分で選ぶことの大切さを考える良い機会になった。自分の高校卒業後の進路についてしっかりと考えたい。」といった感想が見られた。

本校の生徒は、地理的に他校生や外部人材との交流が難しい状況にある。そのため、このような機会に多くの人と交流することは、非常に貴重な機会である。特に、他地域に住む同じ年代の若者との交流から刺激を受ける生徒は多い。外部の人との交流の中で、新しい知識を得たり、意見交換をしたりすることによる学びの効果は大きい。また、そうすることで、自分たちの地域や自分たちの活動を客観的視点から見つめ直すことにもつながっており、自己評価・改善のプロセスとなっている。

#### (エ) 地域理解

1年生を対象に5月に三崎地区の地域見学を行った。入学後間もない時期に地域見学を行うことで、地域理解を深めるとともに生徒の親睦も図った。第1回目は、班ごとに学校から地域の名所や商店を經由して「はなはな」まで歩いて行き、みっちゃん大福を購入するという活動を行った。第2回目は、伊方町最高峰の伽藍山に登り、展望台から町内を見るという活動を行った。

年度当初にこれらの活動を行うことで、1年生の伊方町への関心や愛着を高めることにつながった。これは、その後に行われた町内の各行事等に参加する1年生が例年以上に増加したことや、学校魅力化評価アンケートにおいて、満足度を含め1年生の数値が高かったことからもうかがえた。

他地域からの入学生が増加傾向にある本校にとって、1年生の早い段階でこのような地域理解活動を行うことは、その後の3年間の地域との協働活動における基礎となる。来年度は、学校設定科目の中に編成することで、より系統的な活動になるように計画している。

(オ) 集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム

伊方町は、日本一細長い佐田岬半島に位置しており、東西40キロメートルほどの中に、およそ40の集落が点在している。そのため、現在でも集落ごとに独自の文化が残っている反面、多くの集落で若者の流出による過疎化が進んでおり、伝統行事や文化の継承が難しくなっているという課題も抱えている。それらの集落の活性化なくして、町全体の活性化にはつながらないと考え、「集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム」に取り組むことにした。しかし、それぞれの集落の持つ魅力や抱える課題はそれぞれである。そのため、各集落に合わせたプログラムの作成が必要であると考え、本年度はその第1回目として2月15日、16日に、旧瀬戸町大久地区で、各研究班の合同イベントとなる「せんたん劇場」を開催した。

大久地区を一つの舞台と見立て、アート班を中心に地区内をアート作品で彩り、第1幕から第4幕までの四つのプログラムを実施した。

第1幕「集落でであう」では、昨年度撮影した映画「せんたんビギンズ」スタッフによる撮影裏話「せんたんビギンズトーク」、情報・防災班主催の防災紙芝居と防災カルタ、イベント班主催の「みさこうたいそう115」と大久地区の伝統行事である「しゃんしゃん踊り」などのプログラムを実施して、200名以上の参加があった。保育園児から高齢者まで、多くの地域の人と交流することができた。プログラムの合間には、瀬戸地区名産のさつまいもを使って商品開発A班が作ったスープと焼き芋、コーヒーを、カフェ班が作った移動式屋台で振る舞い、交流を深めることができた。また、今年度開発した「あいたおる」と「裂織りのシュシュ」を販売し、好評を得た。

第2幕「集落をあるく」では、商品開発B班がガイド役になり、60名以上の人に参加してもらい、大久ツアーを行った。外部講師として建築家や芸術家に参加してもらい、それぞれの視点から大久地区の魅力を語ってもらったり、地域の人に地区の神社についての由来や説明をってもらったりするなど、特別な体験が多く、地域理解が深まる活動を行うことができた。

第3幕「集落をかたる」では、せんたん部主催のせんたんビギンズ上映会が行われ、18時開始という遅い時間にもかかわらず、40名以上の参加者があった。上映後には「自分たちの住んでいる町の魅力に改めて気が付いた」「自分たちの町を高校生と一緒に守っていきたい」という感想をもらい、励みになった。

第4幕「集落をあそぶ」では、イベント班主催のウォークラリーである「大久ラリー」が行われ、8チーム30名程度の参加があった。大久地区のポイントを巡りながら写真を撮影してもらい、写真コンテストも開催した。参加者にも、大久地区の魅力を再発見してもらう機会になった。

本プログラムの実施に向け、生徒たちは、それぞれの班でプログラム作成、地域の人への依頼・交渉、現地調査・インタビュー、制作物の作成など様々な活動に取り組んだ。本校では、地域との協働活動に取り組み始めてから今年で5年目になる。しかし、これまでは研究班単位での活動が中心であり、全校生徒が一つのプログラムを行うこ

とはなかった。また、関係者との調整などの作業は教職員が行うことがほとんどであったため、このような形でのプログラムの実施は初めてであった。そのため、スケジュールの管理や実施内容の選定などで苦勞する班もあったが、それぞれの班で話し合いを重ね、地域の人や外部人材を効果的に巻き込むことで、成功させることができた。生徒たちは、振り返りの中で、「想像よりも多くの人に参加してくれてうれしかった」、「地域の人と一緒に活動できて楽しかった」、「準備に時間がかかってしまったので、次は計画の段階からもっと練りこみたい」、「他の地区でもこのようなイベントを行いたい」という意見が見られた。本事業の目的として「ブーマラン人材の育成」を、目標として、これからの時代をたくましく生き抜く力と郷土愛の醸成ということを設定している。地域の集落の中に入り、地域の人たちと共に活動することは、生徒にとって負担となる部分もあるが、それ以上に得られるものが多く、本事業における目的・目標を達成するためには不可欠であると感じた。また、地域との協働という観点からも課題研究の成果を広く地域に発信し、評価してもらう良い機会になると考えている。

来年度以降も、今回作成した移動式屋台を活用して、町内の各集落等で交流活動を実施していく予定である。

#### ウ 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け(各教科・科目や総合的な学習(探究)の時間、学校設定教科・科目等)

基本的には、全学年同時間に開講されている総合的な学習(探究)の時間を中心に、地域との協働による探究的な学習を実施している。今年度においては、教科ごとに、それぞれの教科の授業の中に、どのように地域との協働による探究的な学習活動を行っていくのかということの研究した。

家庭科の授業では、災害発生時等を想定した簡易オムツづくりや、牛乳パックを使用した食器づくり等を行った。また、地域の人を講師に招き、郷土料理の調理実習を行った。郷土料理への興味・関心を高めるだけでなく、地域の人と交流を深めることもできた。

より系統的かつ持続的なプログラムを編成するために、来年度は、学校設定科目「未咲輝学」の設置を予定している。また、理科の授業で電力関係の人を招いてエネルギーに関する授業を行ったり、国語科や地歴・公民科の授業において、地元郷土館の学芸員の方を招いて地域の歴史に関する授業を行ったりすることなどを検討しており、各教科・科目における地域との協働による探究的な学びを推進していく予定である。

#### エ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

国語科の国語表現の授業において、地域の民話を題材にした紙芝居づくりを行った。完成した紙芝居のストーリーを基に音楽Ⅲの授業で伴奏を付け、地域の保育所で披露した。地域のものとはいえ民話に触れる機会はほとんどなく、生徒たちにとって決してなじみが深いものではない。そのため、地域に古くから伝えられてきた民話を読み、興味のあるものを選び、紙芝居にしていくという作業は、生徒たちにとっても新鮮で楽しかったようである。また、保育所で発表した生徒は、子供たちが絵や音楽に反応し、喜んでもらったことで達成感を感じていた。

#### オ 類型毎の趣旨に応じた取組について

地域魅力化型の趣旨を踏まえ、学校と地域が協働することで互いの強みを生かしつつ、さらなる相乗効果を生むことをねらいに活動に取り組んだ。学校の強みとしては、高校生らしい柔軟な発想力を生かした活動を行っていくことや、地域の行事や伝統文化の後継者としてこれらの活動に活力を与えられることである。一方、地域の強みとしては、学校内だけでは実践することのできない探究的な学習活動の場を提供できることや、多様な人との関わりを通して、コミュニケーション能力などの「生きる力」を育むことができるということである。本校は、愛媛県内で高齢化率が2番目に高い伊方町に立地しており、地域課題が生徒一人一人にとって身近なところにある「地域課題先端地域」である。しかし、それを否定的にとらえるのではなく、「最先端の学びができる地域である」と肯定的に捉えることで、生徒一人一人が明るい展望を持ちながら課題解決学習に取り組むことができている。また、地域住民との距離が近く、本校への関心が高く期待も大きいいため、協働的で開かれた活動を行うことができている。

#### カ 成果の普及方法・実績について

本校主催のせんたんミーティングや中学生一日体験入学等の校内行事や、愛媛大学や地域教育実践ネットワークえひめ等が主催する県内の行事、山形県立小国高等学校、立命館宇治高等学校が主催する行事に参加し、10回以上の研究発表を行い、本校の成果普及に努めた。特に、12月27日に徳島県で開催された「エシカル甲子園2019～私たちが創る持続可能な社会～」に四国ブロック代表として出場し、本校の地域協働活動の取組をエシカル消費の観点から発表した。その結果、全国2位となる徳島県知事賞に選ばれるという成果を収めた。年間を通して、本校の研究発表を聞いた人から案内をもらい、さらに別の機会でも発表を行うことも多くあった。

2月20日には、本年度の成果発表会として「未咲輝 - せんたん - 発表会」を開催した。地域関係者だけではなく、他校の教職員の参加もあり、様々な立場の人に参観してもらった。生徒たちは、一年間の研究の集大成として、体験を取り入れたり、成果物を披露したりするなど各班で工夫の見られる発表を行った。新聞社からの取材もあり、多くの人に本校の研究成果を知ってもらうよい機会となった。来年度は、本校以外の施設でも同様の発表会を行うなど、さらなる普及方法の研究に努めたい。

今年度は、フェイスブックページを120回以上更新するなど、情報の積極的な発信に努めた。現在、約520名の方にフォローしてもらっており、一つの記事に対して1,000名以上の人に見てもらうことも多い。特に、全国の同窓生や教育関係者にもコメントをもらうことがあり、そこから新たな活動が生まれることもある。新しい情報発信の方法としての手ごたえを感じており、今後も有効活用を行っていきたい。

### (3) 研究開発の実施体制について

#### ア 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

校内の教育課程委員会において、各教科等における取組内容や、実施時間の原案を年度当初に作成した。その原案を基に、カリキュラム再編のための校内検討会議を開き、実際の運用や実施状況についての情報共有を図った。また、コンソーシアムや運営指導委員会

においても、実施状況等を報告し、適宜、指導・助言を受けた。

イ 学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

地域協働課を中心として、本校がこれまでに築き上げてきた実施体制において研究を行った。具体的には、研究テーマごとに生徒を縦割りにした班を作り、複数名の担当教員を配置した。教員の役割としては、生徒の活動における助言や、外部人材との連絡、調整等が挙げられる。地域協働課員は、各研究班に必要な外部人材の紹介、調整を行ったり、班ごとの連携を図ったりするなどして担当教員のサポートを行った。また、各研究班の担当教員や代表生徒が定期的に進捗状況等を話し合う場を設定することで、各班がスムーズな情報交換を行い、それぞれ連携したり、サポートし合ったりしやすい環境作りを行った。さらに、カリキュラム開発等専門家から助言や提案、外部人材の紹介をしてもらうことにより、より深まりのある取組を行うことができた。

ウ 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

総合的な学習（探究）の時間に、班ごとに生徒が記録簿を記入し、進捗状況が分かるようにしている。成果の検証については、年度当初と年度末に生徒対象に実施したルーブリックの分析や、生徒のレポート、成果発表会などから総合的に判断した。年度末には、地域協働活動成果検証会を行い、本年度の成果の検証と次年度の改善点を話し合う機会とした。

エ カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

本校の取組についてそれぞれの立場からの指導・助言をしてもらった。コンソーシアムのメンバーは地域の人を中心に参加してもらっているため、本校の取組が地域の中でどのように評価されているか、地域の人に情報をよりよく伝えるためにはどうすればよいかという、地域に根差した具体的な意見をもらうことができた。今後も、本校と地域の懸け橋として指導・助言をってもらう予定である。

## 8 目標の進捗状況、成果、評価

本事業の研究開発開始時に八つの目標を設定した。

本構想において実現する成果目標は三つある。一つ目の「生徒による3年間の地域協働活動における成果報告書の提出率100%」という目標においては、その準備段階として、本年度の1、2年生全員が年度末に成果報告書を提出している。自らの探究活動を見直すことで、次年度への改善を図るとともに、自らの考えを論理的に表現する力を伸長させることができると期待している。二つ目の「高校卒業後地元への就職率60%」という目標においては、今年度卒業生の地元への就職内定率は75%となっており、目標を達成している。昨年度卒業生の地元への就職率は47%であり、本事業を通して地元への愛着を高めた生徒が増加したためではないかと考えている。この傾向を来年度以降も継続させ、三つ目の「高等学校卒業後10年以内の地元への就職率30%」という目標を達成できるようにしたい。

地域人材を育成する高校としての活動指標における目標も三つである。「地域と協働した取組を含む研究授業の年間実施回数5回」という目標においては、2021年度の目標達成に向け、

本年度は各教科において研究に取り組んだ。具体的には、国語科の授業で4時間、芸術科音楽の授業で6時間、家庭科の授業で10時間、英語科の授業で1時間程度の時間で地域と協働した取組を含む授業を行った。また、家庭科で4時間、地域の人を講師として招いたり、成果物を地域の人に見てもらったりすることで、地域の人にも本校の探究活動に興味を持ってもらうよい機会となった。「地域と協働した取組に関する年間研究発表回数5回」という目標においても、2021年度の達成に向け、本年度は研究を進めた。校内の研究発表会に加え、様々な機会をとらえ10回程度の研究発表を行い、幅広い年代や立場の人に本校の取組を知ってもらうことができた。特に、中学生一日体験入学や学校見学に来た中学生が本校の地域協働活動に強い関心を持つことが多く、本校の魅力の創出につながっていると感じている。「学校フェイスブックの1か月当たりの平均更新回数15回」においては、4月から2月の間で122回、月平均10回更新した。ホームページと連動して活用することで、相乗効果により、これまで以上に多くの人に本校の情報を届けることができています。

地域人材を育成する地域としての活動指標における目標は二つである。

「外部人材として参画する民間等の団体数10団体」という目標においては、現在7団体の参画がある。今後も多くの団体と協働することで、2021年度の目標達成に向けて活動を推進したい。「ブーメラン人材へのUターン支援プログラムの実施回数3回」という目標においては、1年生のインターンシップ実習の実施や、全校生徒による地方祭への参加等の活動を通して、郷土愛等を高めることができた。今後は、伊方町と連携した支援プログラムを実施することで、さらに、ブーメラン人材として必要な力の育成を目指したい。

目標の多くが中・長期的な達成目標であるため、本年度はその準備期間という意味合いが強かった。来年度は、本年度の取組を基に目標達成に向けた具体的な取組を行っていききたい。

#### <添付資料> 目標設定シート

### 9 次年度以降の課題及び改善点

初年度の活動を通して、探究活動が活発化し深度が深まっていくにつれ、生徒・教員ともに負担が増加するという課題や、生徒や担当教員によって知識や経験の差が大きいため、新しいことに取り組む際に企画段階で時間がかかるという課題が生まれた。

負担が増加するという課題の原因としては、主となる活動時間が週に1時間の総合的な学習（探究）の時間しかないため、放課後等の時間を使わざるを得ないことや、各種行事が休日に行われること、突発的に高校への行事参加依頼等が入ることなどが挙げられる。

その改善策としては、各教科の中で地域協働活動に取り組むカリキュラムの作成をより推進していく必要がある。また、地域との連携をさらに進めることで、休日の行事における生徒の活動を地域の人に依頼することにより、教職員の負担を減らすことができるのではないかと考えている。生徒の負担を減らすための改善策としては、地域活動の増加単位制度について研究している。地域行事等への参加に応じて、総合的な学習（探究）もしくは学校設定科目において最大2単位までの単位増を認めることで、生徒の、より主体的な行事参加を促すとともに、負担感の軽減につながるのではないかと考えている。これらの改善策を実行するためには、地域関係者との協議や校内の調整等が必要になるため、関係者で話し合いを進めて導入に向けて検討していきたい。来年度は、生徒が参加する可能性のある地域活動や地域行事をリストアップし、それぞれの活動について、その責任者や活動時間等を明確にしていきたい。そうすること

で、活動への計画的な参加や、学校全体としての予定を立てやすくなると考えている。その作業が完了し次第、外部の人による生徒監督や増加単位制度の試験的な運用を行う。その結果を基に、最終年度の本格的な実施を目指したい。

知識・経験の不足については、学校をより開かれた場所にして様々な立場の人に探究活動に関わってもらい、それらの人の知識や経験を学習活動の場で活用していくことが必要だと考えている。地域人材や外部の専門家の積極的な活用を推進することで、学校教育だけでは不足している知識や経験を補い、スムーズな探究活動を推進していきたい。また、教科間の連携や教科を横断する取組を増やすことで、それぞれの教職員の持つ知識や経験を共有していきたい。学校全体でチームとして事業に取り組むことで、活動の質を上げるとともに、関係者の負担を減らすことができるようにしていきたい。

本年度は、各研究班における地域人材や外部の専門家の発掘、依頼は地域協働課が行ってきた。来年度は、各班の生徒や担当教員の要望を聞く機会を設けて、より柔軟な実施を行いたい。また、本年度は、研究班を横断した情報共有の機会は不定期に行ったが、来年度は月に一度は機会を設け、定期的に行うようにしたい。

本年度の取組を基に、さらに系統的かつ、持続的な取組を行っていくために、来年度には学校設定科目「未咲輝学」の開講を予定している。

1年生は、「地域理解」をテーマに、地域の名所・史跡見学や地域の産業調査、インターンシップ等の活動を行う。地域の郷土館の学芸員や地元企業の人に協力してもらい、地域の人と積極的に関わることで、より深く地域理解を行っていききたいと考えている。

2年生は、「地域課題の発見・解決」をテーマに活動を行う。地域課題を経済的側面から考察するために、経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が提供しているRESAS（地域経済分析システム）を用いて研究を進める。その研究結果を「地方創生☆政策アイデアコンテスト」や「全国高校生マイプロジェクトアワード」に応募することで、第三者による客観的評価を得る場とし、自分たちの活動の見直し、改善を図る機会ともする。

3年生は、「みっちゃん大福」や「裂織り」といった、総合的な探究の時間等に開発した商品を中心にして、マーケティング、製造、販売等を行う模擬企業経営等を行う。1、2年次の活動の集大成とするとともに、経済活動の観点を取り入れた探究活動を行っていくことで、起業家育成の基礎ともしたい。

地域の特色を生かした商品づくり、販売を行うことで、地域の魅力を発見し、地域の新たな雇用の場としてブーメラン人材の地域へのUターンを促すとともに、地域経済を支えることのできる起業家の育成を目指して学校設定科目の研究に取り組んでいきたい。

**【担当者】**

担当課	高校教育課	TEL	089-912-2954
氏名	野村 竜也	FAX	089-912-2949
職名	指導主事	e-mail	nomura-tatsuya@pref.ehime.lg.jp